

# 平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ヤナギムシガレイ

学名 *Tanakius kitaharae*

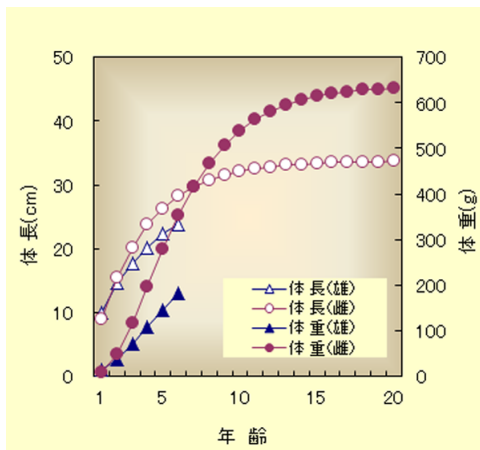
系群名 太平洋北部

担当水研 東北区水産研究所



## 生物学的特性

寿命: 雄6歳、雌20歳(ほとんどの個体は10歳以下)  
成熟開始年齢: 2歳(雄の大部分、雌の一部)、3歳(雌の大部分)  
産卵期・産卵場: 1～6月(ピークは1～3月)、水深100m前後の沿岸各地  
索餌期・索餌場: 周年、水深50～400mの砂泥域  
食性: 主に多毛類と甲殻類  
捕食者: 不明

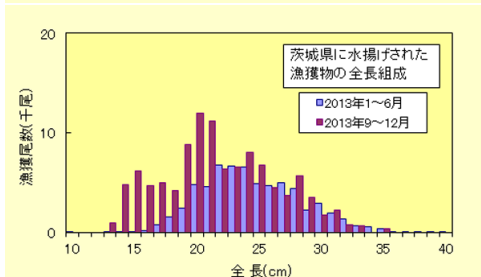
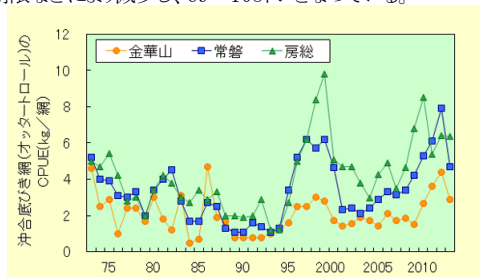
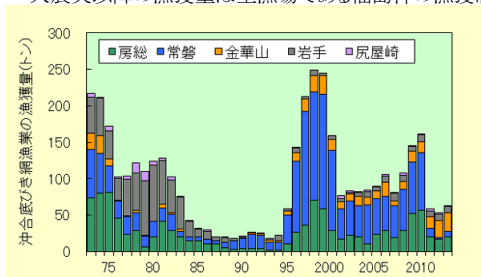


## 漁業の特徴

太平洋北部海域では、沖合底びき網漁業で最も多く漁獲され、次いで小型底びき網漁業による漁獲が多い。寒流系の種ではないため、本海域の中でも南側に位置する福島と茨城で漁獲が多く、北側の青森と岩手では少ない。主漁場は水深50～200mであり、繁殖期の冬場には80～100m、その他の時期には120～140mでの漁獲が多い。

## 漁獲の動向

沖合底びき網漁業の漁獲量は長期的に変動している。近年では、1990年代後半は240トン以上で多かったがその後減少した。2001～2008年は76～108トンで推移し、2010年は152トンであった。全漁業種類の漁獲量は1997～2000年に288～386トン記録した後、減少したが、2009、2010年には220トン前後に回復していた。2011年3月の東日本大震災以降の漁獲量は主漁場である福島沖の漁獲制限などにより減少し、69～108トンとなっている。

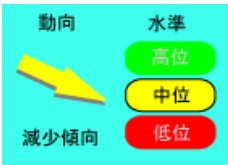
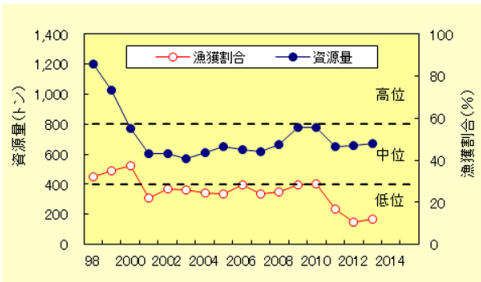


## 資源評価法

1998～2013年に茨城県もしくは福島県で漁獲されたヤナギムシガレイについて、年別前後期別(1～6月と9～12月)雌雄別の体長階級別の年齢組成を作成した。これと漁獲尾数をもとに年齢別漁獲尾数を求め、1～7歳以上の7年齢群についてコホート解析を行った。年齢別の資源尾数に各年の各年齢の平均体重を乗じ、震災の影響による漁獲圧の減少も考慮して資源量を推定した。

## 資源状態

沖合底びき網漁業の漁獲量およびCPUEから、資源は1997～1999年に多かったが、その後大幅に減少したと考えられる。その後、2001～2010年は増加傾向にあったが、2013年は減少した。コホート解析から求めた資源量も2009、2010年には多かったが、2011～2013年には2001～2008年よりも若干多い程度に落ち着き、2013年は673トンと推定された。CPUE、資源量の変動から、資源の水準、動向はそれぞれ中位、減少と判断した。



管理方策

現在の資源は各年齢の固体がまんべんなく取り残されているのが特徴となっており、1歳魚に対する漁獲圧もさほど高くない。また、近年の加入はあまりよくないものの震災以降の漁獲圧は低い状態である。震災以前の漁獲を続けても資源量、漁獲量共に高い水準で維持されるため、震災前(2006～2010年)の漁獲圧を基準値とした。ABC算定規則の1-3)-(3)により、F2006-2010をFlimit、Flimitに安全率0.8を乗じたものをFtargetとし、ABCを算定した。

|           | 2015年ABC | 管理基準              | F値   | 漁獲割合 |
|-----------|----------|-------------------|------|------|
| ABClimit  | 192トン    | 0.8F2006-2010     | 0.36 | 25%  |
| ABCtarget | 171トン    | 0.8・0.8F2006-2010 | 0.29 | 22%  |

- F値は各年齢の平均
- 年は暦年

資源評価のまとめ

- 体長階級別の年齢組成により年齢別漁獲尾数を求め、コホート解析により資源量を推定
- 2013年の資源量は1998年以降で6番目に多い値
- 資源の水準は中位、動向は減少

管理方策のまとめ

- 親魚は商品価値が高いので、親魚までの生き残りを高めることが生物的、社会的に重要である
- 現在の加入水準が維持されるという条件のもとでは、漁獲シナリオを震災以前の漁獲圧としても資源量、漁獲量のある程度の水準で維持することが可能である

執筆者：成松庸二・伊藤正木・服部 努・柴田泰宙

資源評価は毎年更新されます。